

巻頭言：発達について考え直す

橋本和明

発達障害という概念が広がり、子どもだけでなく大人にもその障害があるとようやく認知されるようになってきた。そして、教育や医療の分野だけでなく、会社や地域などの一般社会にも発達障害についての知識が浸透してきている。それはある意味では喜ばしいことではあるが、そこには同時に弊害も出てきている。端的に言うならば、発達障害（あるいは発達障害者）を自分とは縁のない遠いところに置きやり、それらとのかかわりを持つとせず単に外から眺めているような社会の傾向が日増しに強くなっていくということである。

ある人がちょっと場の雰囲気を読めず、周りの空気を乱すような発言をしたことがあった。すると、そこにいた人は「あの人はコミュニケーションに問題がある発達障害だ」と決めつけ、その人の話に耳を傾ける努力すらせずに、途端に距離を置こうとした。あるいはこんなこともあった。何かにこだわりが強く、場面場面で柔軟な動きができない不器用な人だった。すると、周囲の者は「あの人はこだわりが強く、見通しの乏しい発達障害だ」とあたかも本質を見抜いたかのように勝手に判断し、困っているその人に手助けもせずに遠回しで見ているだけだった。こんな風になってしまうと、どこか発達障害が一人歩きしてしまい、人とのコミュニケーションやかかわりそのものが後退し、生産的なことが何も生まれてこない。

発達障害が教育現場で注目された頃、「発達障害の特性はその人の個性であり、一人ひとり違って当たり前」といった言い方をされた。発達障害児は定型発達児ができていないことがスムーズにできなかったり、集団に合わせて行動することが苦手なところがあったためである。発達障害を有する人は通常とは違った特性があるが、その違いを個性として受け止め、互いにそれを尊重することによって一緒にやっという、いわば“差異性”が強調された。確かに、人それぞれ考え方も価値観も違うし、個性が存在して当たり前で、人間社会はそれで成り立っている。発達障害の特性もその違いの一つとして捉える点ではまったくその通りである。

ただ、どうもその傾向が強くなり過ぎ、やや妙な方向に行こうとしているような心配もないではない。先に述べたように、あまりにも発達障害を自分とは違った存在と考えすぎているためか、自分との間に遠く距離を置いてしまっているのである。

考えてみてほしい。発達障害があってもなくても、われわれは誰しもみんなとは違う自己主張をしたがる人間である。そのため、時には意見の食い違いが生じたり、齟齬が生まれる。また、自分なりの趣味や価値観があり、時にはそれにこだわられるからこそ楽しみを謳歌できたり、不安やストレスを下げたりして日常生活が送れる。この私も仕事が山積みされた逆境に置かれると、本来は期限が迫っている仕事からすべきところを、優先順位がつけられずに、どうでもいい仕事からやってしまうというドジをしてしまう。これなんかも発達障害の特性の一つと言えばそうかもしれない。その程度はそれぞれではあるにしても、大なり小なり発達障害の特性と似ているところをわれわれも有しているのである。私はこれを“類似性”と呼んでいる。要するに、発達障害を“差異性”だけで見ないで、“類似性”という視点からも捉えていくからこそ、そこにかかわりが生まれるのである。

平成31年度から花園大学に「発達教育学部」という新しい学部を設置し、保育士や幼稚園、小学校、中学校、特別支援等の教員の資格が取得できるように計画をしている（30年3月に認可申請予定）。発達

巻頭言

をしっかりと見据え、適切な教え、健全な育ちを提供できる人材育成を目指そうとしている。その意味でも、発達障害の“差異性”と“類似性”を肝に銘じたいものである。

(HASHIMOTO Kazuaki、花園大学)